

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Endangered Languages of the Pacific Region

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崎山, 理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001906

太平洋地域における危機言語とその問題点

崎山 理

- | | |
|---------|-------------------|
| 1 言語的背景 | 3 太平洋地域の少数民族語と共通語 |
| 2 言語的階層 | 4 最後に |

1 言語的背景

現在、太平洋地域で話されている言語は、数万年前から2、3万年にかけ行なわれた最も古い民族移動によって形成されたオーストラリア、ニューギニア、そして、紀元前3千年前、アジア大陸から移動したモンゴロイドのオーストロネシア語族の、大きく3つの言語グループが存在する。各地域別にみると、オーストラリアの原住民諸語が250、ニューギニア島（インドネシア領イリアンジャヤ（現パプア州）を含む）とその周辺のパプア諸語が750、一方でオーストロネシア語族はメラネシアに450（うちニューギニアに100）、ポリネシアに20、ミクロネシアに12のようにきわめて数が多い（Comrie et al. 1996）。またその言語同士の相違は、異なる言語グループのみならず語族間でも大きい。このうちオーストラリア諸語、パプア諸語は比較言語学的手法による語族の証明がほとんどできていない。さらに太平洋では、各言語の話者数が少なく、また通常、有力言語が存在しないことも特徴である。しかし、人びとには近隣の言語は話せるか理解できるといった二重（あるいは複数）言語使用の状態が存在し、歴史的にもそのような状況が長く続いたと推定される。文化的要因として太平洋地域における言語の多様化は、各集団が言語的差異を際立たせることによって内集団と外集団とを区別するという、言語の紋章的な（*emblematic*）機能によっても加速されたと考えられる（Grace 1981）。

太平洋地域のオーストロネシア語族は大半がオセアニア諸語に属するが、ミクロネシアのチャモロ語、パラオ語は西部マライ・ポリネシア語派（WMP = 旧称インドネシア語派）に、また東部インドネシアのマルク、イリアンジャヤの土着語は中部マライ・ポリネシア諸語（CMP）と南ハルマヘラ西ニューギニア諸語（SHWNG）に属するというように、ニューギニア島を取り巻く周辺地域では系統が多様なうえに各言語間の相違も大きい。とくに、CMPとSHWNGはオセアニア諸語のなかでの旧分類ではメラネシア語派と共通した言語的特徴を示す。このような言語状況、言語特徴はこの地域において長期にわたる民族移動とパプア系先住民との言語接触、言語混合の結果により生じ

た。現在もなお、インドネシアのハルマヘラ島北部、ヌサトゥンガラ州のパンタル島、アロル島、ティモール島中部・東部はパプア諸語の行なわれる地域である。またニューギニア島に至ったオーストロネシア語族のなかには、パプア諸語との言語接触の結果、語順変化を起し、S-V-OがS-O-V（オーストロネシア2型とも呼ばれる）となる言語も出現した（崎山1994）。

2 言語的階層

このような状況下において、19世紀以降のヨーロッパの列強による植民地化は新たな言語的状况を発生させた。まずヨーロッパの言語とメラネシア諸語を基にした混合語がしだいに共通語として成立した。このような混合の起こる苗床として、サモアやオーストラリアのクイーンズランドで経営されたプランテーションにメラネシア系の言語を話す人びとが結集したという事実は重要である。混合語というのは、それぞれの言語が文法の一部を提供しあって形成される言語のことである。ただし、ピジン語といわれるとき、通常、片方の強力な言語からの偏見を伴った貶称となることが多い。この新しく形成された共通語はメラネシアピジンと総称され、その方言であるトクピシン、ビスラマ、ソロモンピジンは、それぞれ祖国に持ち帰られ、そこであらたに開花することになる。それが可能となったのは、パプア・ニューギニア、ヴァヌアトゥ、ソロモン諸島がすべて多言語社会であったからで、有力言語が存在しない状況のもとで使用者が急速に増加する一方、結果として少数民族語の存在を危うくしてきた。このようなピジンがクレオール（母語）化してゆく事例は、ソロモン諸島でソロモンピジンを話す5才以上の層が1千人以上に達した例（1976年）や、ヴァヌアトゥで100以上の土着語と英・仏語のうえにかぶさるビスラマが人口17万人（1996年）のほぼすべてによって話されるというデータからも明らかなように、一部ですでに始まっているとみてよい。とくにニューカレドニアに移民した1千人以上はビスラマを第一言語とする。人口430万人（1996年）を擁するパプア・ニューギニアの場合、状況はよりドラマチックである。1982年にはトクピシンを第一言語にするもの5万人に達し、また第二言語として200万人が使用している（Grimes 2000）。

3 太平洋地域の少数民族語と共通語

UNESCOの『世界の危機言語地図』（Wurm 2001）では、「大太平洋地域」として日本、台湾、フィリピン、マレーシア、インドネシア、パプア・ニューギニア、ソロモン諸島、ヴァヌアトゥ、ニューカレドニア（ロイヤルティ諸島を含む）、フィジー（ロ

トウマを含む)、ミクロネシア、ポリネシア、オーストラリアの現状が概説されている。ただし、この太平洋地域の危機言語地図(65頁)に本来あるべき言語名が完全に欠落しているのは編集上のミスからであろう。遺憾である。次に、私の調査した地域、言語のなかからいくつかの危機言語について報告する。

1) ミクロネシア・ベラウ

ベラウ政府の統計(1990年)では、全人口15,122人のうち、離島のソンソロール地区61人、ハトホベイ(=トコベイ)地区33人が計上されているが、ソンソロール地区には、ソンソロールのほか、ファナー、メリル、プル・アンという4つの離島が含まれる。ハトホベイ語(Hatohobei)とともにこれら離島の言語は、西部マライ・ポリネシア諸語のパラオ語とは異なり、カロリン諸島で話されるオセアニア諸語のなかの中核ミクロネシア諸語(別名、チューク諸語 Chuukic)を構成する。これらの諸言語をソンソロール語(Sonsolorese)で一括し総数を600人とする(Wurm and Hattori 1981-83)のは、沖縄の宮古方言を一括して分類するほどの荒さがある。その後、確実にチューク諸語の話者は減少している。離島のんびとは、今世紀初めのドイツ時代からベラウの離島アラカバサン島のエアンに移住させられているが、現在、その数は数百人、そしてこの地で生れた世代はパラオ語しか話せない者が多くなっている。なお、プロ・アナ語(Pulo Annian)は1975年で50人と推定される(Oda 1977)。メリル語(merir)はその後も減少を続け、現在、すでに絶滅したと思われる。ただし、戦後作られた選挙制度に対し維持された伝統的首長制はメリル地区にも残されている。

なお、今世紀初頭から終戦までミクロネシア(旧南洋群島)に南洋庁が置かれていたため現在まで共通語として日本語の影響が残っている。ミクロネシアの言語情報として英語の話者が何人という情報は示されている(Grimes 2000)にもかかわらず、日本語にはまったく言及されていないのは問題である。1970年の調査では35才以上の人が「基礎日本語」を話せる(Wurm et al. eds. 1996)ことから、1998年では63才以上の人に相当する。ベラウ政府の統計(1990年)から推計すると、これらの人々は現在も1千人以上は健在であると推定される。また、女子の就学率は低かったといわれる現ミクロネシア連邦のヤップ州では、日本語を話せる人はすでに500人を割ったとみてよい。

もし日本がミクロネシアの占領をそのまま続けていたら、ミクロネシアは確実に日本語の単一語地域となり、土着語は消滅したであろう(Wurm et al. eds. 1996)という指摘は、日本の言語政策を過酷に評価したためであろう。実際には、日本語について校外では取り立てて言うほどの方策は取られなかった。ミクロネシアでそれまで島嶼間の共通語がなかったから、現在も島が異なる老年層の間で日本語が共通語として用いられる(崎山 1995; Toki 1998)。しかし、そのビジン化した日本語は、まさに一代限りでその役

割を終えるだろう。その意味では危機的である。同じような現象が、かつてのドイツの植民地であったバブア・ニューギニアのラバウルで発生し、現在、話者数が危機的状况にあるクレオール（別名、ウンザー・ドイツ語）に見出される（Volker 1981）。台湾では、現在も50才以上の人びとがリンガ・フランカとして「ピジン日本語」を現在も使用し（Wurm et al. eds. 1996）、話者数は1万人（1993年）とされる（Grimes 2000）。

2) ミクロネシア・ヤップ

ヤップ島とベラウ諸島の間に位置するングルウ環礁のングルウ語（Nguluwan）はヤップ語とチューク諸語に属するユリシ語（Ulithian）との混合語で、音韻体系はユリシ語、そしてヤップ語の文法を不完全に継承する（Sakiyama 1982）。ングルウ語はユリシ語とヤップ語のバイリングアルの状態から生れたことは考えられるが、これをユリシ語の方言とする（Grimes 2000）のは誤りである。1980年当時、話者は28人で親村のあるヤップ島のグロル村への移住者を含めても50人を割り、ヤップ語、ヤップ文化への同化が急速に進んでいる。

3) インドネシア・マルク

117の民族語（オーストロネシア語族、バブア諸語）について話者数、居住地、移住地、アクセスの仕方、簡単な文化情報、数詞と基礎表現を添えた資料が公開された（Taber 1996）。とくにC.L.Voegelin and F.M.Voegelinの『世界言語の分類と索引』（1977）の不正確と誤謬を正している点が評価できる。また言語と方言との区別を先天的了解度に基づいて行なったとしている。1千人を割った言語として、最少の5人のナカエラ語（Nakacla, セラム島）、50人のアマハイ語（Amahai, セラム島）、パウロヒ語（Paulohi, セラム島）を初め、1千人の南ヌアウル語（Nuaulu, セラム島）、ファタマヌエ語（Fatamanue = ヤラハタン語 Yalahatan, セラム島）までに15の言語名が列挙されている。しかし、このデータも完全とはいえず、たとえば、バジヨ語（Bajo）が含まれていない。バジヨ人はいくつかの離島に住むため、アクセスが困難なための漏れと思われる。なお、私は1997年と98年にファタマヌエ語（Sakiyama 1999）、1997年にサンクワン島のバジヨ語の調査を行なった。

4) バブア・ニューギニア、バブア

800以上も言語があり、世界一言語密度が高いと言われるニューギニア島とその沿岸地域の言語名、話者数と研究情報は（Barr and Barr 1978; Voorhoeve 1975; Wurm 1982）に詳しい。ただし、その総数のうち話者が1千人以下の言語は半数以上（417）に達し、そのなかには近年（1950年以降）になって消滅した六言語（オーストロネシア語族：ゲ

トマテ語 (Getmate), カニエト語 (Kaniet), カロレ語 (Karore), アヒ語 (Ahi) = ラエ語 (Lae), パプア諸語: カラミ語 (Karami), ムラハ語 (Mulaha) も含まれる (Nekitel 1998)。ニューギニアでは、少数民族語のみならず多数民族語についても、これまで十分な調査研究が行なわれたとは言いがたく、語彙すら収集されていない言語も多い。このうち辞書か文法が刊行された言語は全体の十分の一にも満たないだろう。ただしこれまでに、SIL (言語学夏期講習所) が正書法を制定のうえ刊行した『福音書』は数十言語におよぶ。パプア諸語のなかには十数万人におよぶエンガ諸語, チンプ諸語, ダニ諸語のようなかなり大きな言語からアバガ語 (Abaga) 5人 (Wurm 1982では150人), マコルコル語 (Makolkol) 7人 (Wurm 1982では不明), セネ (Sene) 語10人以下のような危機的言語までさまざまであり, また正確な話者数が不明な言語も非常に多い。さらに最新の情報が必要である。ムリク語 (Murik) は, 1千数百人 (Wurm 1982; Grimes 2000) という話者数にもかかわらず, トクピシンのクレオル化で村ではムリク語を話す若者がいなくなり, ムリク語は消滅に瀕している (Foley 1986)。そもそも, 現在列挙されている言語だけがすべてなのかも問題である。また, インドネシア側のイリアンジャヤ州では現在, 調査が許可されないうえ, 新しい言語情報が一層乏しい。

私が1984-85年に調査したパプア諸語のうち, クオット語 (Kuot, ニューアイルランド島), タウリル語 (Taulil, ニューブリテン島), スコ語 (Sko, イリアンジャヤ) は, いずれも話者が数百人, とくにタウリル語は, 老人の言うことは分かるが話せない若者が増加し, 加速度的に隣接するラバウルの交易言語である土着語クアヌア語 (Kuanua) にシフト (乗り換え) し, 取り替えが起こっている (各項目『三省堂言語学大辞典』)。

5) メラネシア・ソロモン諸島

メラネシアのソロモン諸島のうち, パプア・ニューギニア領のブーゲンヴィル島を除く島嶼部は, 現在, ソロモン諸島国を構成する。その総人口は39万人 (1996年) で, 現役のパプア系, メラネシア・ポリネシア系の土着言語数は63, このうち話者が1千人を越えるのは37言語に達する (Grimes 2000)。また, 1931年時点ですでに危機的状況にあり, その後, わずかの言語情報を残して絶滅した言語にニュージョージア島のパプア諸語のカズクル語 (Kazukuru = グリグリ語 Guliguli = ドリリ語 Doriri), また, 1990年には, メラネシア語派ではサンタクルーズ諸島のタネマ語 (Tanema), ヴァノ語 (Vano), サンタイサベル島のラグ語 (Laghu) が絶滅した。ただし, いずれも話者が絶えたのではなく, 隣接する交易言語ロヴィアナ語 (Roviana) へのシフト, ソロモンピジンとの取り替えが原因である (崎山 1996)。

6) メラネシア・ヴァヌアトウ

ソロモン諸島国とよく似た状況にある。ビスラマによる公式の見解では「現在、110の土着語 (lanwis) をもつ地域があり、大きな言語的相違がある。村人は毎日、土着語だけで会話をし、ビスラマや英語やフランス語ではない」(I gat sam ples long 110 lanwis evriwan so i gat bigfala lanwis difrens long Vanuatu. Pipol blong wan velej ol i toktok long olgeta bakegen evridei nomo long lanwis be i no Bislama, Inglis o Franis. (*Vanuatu*, Institute of Pacific Studies: 1980)) というが、実際は、総人口の93%を占めるメラネシア・ポリネシア語派系人口17万人 (1996年) の土着語のうち、アオレ (Aore) 語は1人 (Wurm and Hattori 1981-1983では絶滅)、10人のマラグス語 (Maragus)、ウラ語 (Ura)、20人のナサリア語 (Nasarian)、ソワ語 (Sowa)、50人のデイクスン・リーフ語 (Dixon Reef)、ロレディアカルカル語 (Lorediakarkar)、マフェア語 (Mafea)、タンボタロ語 (Tambotalo) などと少数民族語が続く。そして話者が100人台の言語を含めるとおよそ全体の半数になるにもかかわらず、まったく言語情報を欠くものほとんど言語情報がないものとの総数は全体の3分の2以上 (88) に達し (Lynch 1994)、ビスラマの普及と裏腹に危機的状況にある。

7) メラネシア・ニューカレドニア

総人口14万5千人のうち土着人は6万2千人、1981年現在で28言語 (メラネシア語派と一つのポリネシア語=ウヴェア語 Uvean) があり、このうち2千人以上の話者がいるのはチェムヒン語 (Cèmuhi)、パイチン語 (Paici)、アンジャ語 (A'jië)、ハランチュウ語 (Xàràcùù)、そしてロヤルティ諸島のデフ語 (Dehu)、ネンゴネ語 (Nengone) の3言語のみである。

数百人のダウンベア (Dumbea = パイタ Païta) 語は Shintani et Paita (1990)、400人と推定されるティンリン語 (Tiri) は Osumi (1995) によって記述された。ティンリン語の話者はハランチュウ語、アンジャ語と二重言語使用である。また、ヌレ語 (Nerë) 20人、アロ語 (Arhö) 10人、そして1946年、3人の話者がいたワームワン語 (Waamwang) は絶滅した (Grimes 2000) と報告される。なお、今世紀初頭から始まったジャワ人移民の子孫が数千人に増加し祖国から隔離されたジャワ語が独自の発達を始めているのが、新しいピジン化として動態的に注目される。

8) オーストラリア

1788年、最初のヨーロッパ人がオーストラリアに渡来したとき、700の異なる部族が住み人口は50万人から100万人であったと推定されている (Comrie et al.1996)。その後、1830年代にタスマニア語が絶滅したのをはじめ、現在、原住民諸語はその半数以下に減

少した。しかし、1981年、最後の話者が亡くなったワルング語 (Warrungu)、話者200人のジャル語 (Djaru) は、Tsunoda (1974) により詳細な記録が残された。また、ニュルニル語族のヤウル語 (Yawuru) は話者がすべて60才以上で20人足らずといわれ、Hosokawa (1992) による記述がある。

4 最後に

太平洋は遠い過去から近代まで、人の動きの激しいところであった。また、トンガ王国を除いてあらゆる国ぐにが植民地化されたという歴史をもつ。太平洋地域においてはこのような歴史的事情を反映した言語的階層 (multilevel diglossia) が、いずれの地域でも存在する。

ミクロネシアでは世代により英語 (公用語) かピジン日本語 (島嶼間長老会議語) が最上位にあるが、さらに政治的単位として大きな島ごとの言語、パラオ語、ヤップ語、ボヌペイ語が次ぎ、そして各民族語 (主として離島の言語) が最下位に位置する。インドネシアのマルク諸島では公用語であるインドネシア語の下に、地域的マレー語であるアンボンマレー語、北マルクマレー語、バチャンマレー語などが次ぎ、その下には地域の優勢言語、アンボン島ではヒトゥ語 (Hitu, 1万5千人)、あるいはハルマヘラ地域ではテルナテ語 (Ternate)、ティドレ語 (Tidore) が都会の言語として重要で、最下位に各民族語が位置する。パプア・ニューギニアの場合、標準英語に次ぎ、パプア・ニューギニア英語、民族の共通語としてトクピシンとヒリ・モトゥ語 (Hiri Motu)、そしてその下には地方的・職能的共通語 (ヒリ・モトゥ語 = パプア湾沿岸の治安語、ヤベム語 (Yabêm) = フオン湾沿岸の布教語、マレー語 = インドネシアとの国境地帯の交易語など) と続き、日常語として各民族 (部族) 語が位置する。ポリネシアの例としてハワイをあげると、英語とハワイ英語に続いて、英語とオセアニア諸語をベースにした混合語であるダ・キネ語 (Da Kine Talk) (= トゥ・ダ・マックス語 Pidgin To Da Max) がハワイに居住する東洋系移民たちの共通語となり、その下に民族語であるハワイ語と各移民の言語 (広島方言を基礎にした日本語、広東語、韓国語、タガログ語など) が位置している。危機的可能性が現われるのは、すべて最下位にある少数の土着語である。

言語的階層はこれまでの言語学プロパーからの報告ではほとんど言及されていない。今後、社会言語学、言語人類学的な視野での調査が必要である。

文 献

- Barr, Donald F., and Sharon G. Barr
1978 *Index of Irian Jaya languages*. Pre-publication draft. Abepura: Cenderawasih University and Summer Institute of Linguistics.
- Comrie, Bernard, Stephen Matthews, and Maria Polinsky
1996 *The Atlas of languages*. New York: Facts On File.
- Foley, William A.
1986 *The Papuan language of New Guinea*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grace, George W.
1981 *An essay on language*. Columbia, S.C.: Hornbeam.
- Grimes, Barbara E. (ed.)
2000 *Ethnologue, languages of the world*. 14th edition. Dallas, Texas: Summer Institute of Linguistics.
- Hosokawa, Komei
1992 *The Yawuru language of West Kimberley: A meaning-based description*. Ph.D. diss., Australian National University.
- Lynch, John
1994 *An annotated bibliography of Vanuatu languages*. Suva: Pacific Information Centre.
- Nekitel, Otto I.M.S.
1998 *Voices of yesterday, today and tomorrow*. New Delhi: UBS Publishers' Distributions.
- Oda, Sachiko
1977 *The syntax of Pulo Annian*. Ph.D. diss., University of Hawaii.
- Osumi, Midori
1995 *Tinrin grammar*. Oceanic Linguistics Special Publication 25. Honolulu: University of Hawaii Press.
- 崎山理
1994 「ヒリモトゥ語の類型——辞順と後置詞」『国立民族学博物館研究報告』19 (1), 1-17.
1995 「ミクロネシア・ペラウのビジン化日本語」『思想の科学』95 (3), 44-52.
1996 「複合的な言語状況」秋道智彌ほか編『ソロモン諸島の生活誌——文化・歴史・社会』pp.36-48, 東京: 明石書店。
- Sakiyama, Osamu
1982 The characteristics of Nguluwan from the viewpoint of language contact. In Machiko Aoyagi (ed.) *Islander and their outside world*, pp.105-128. Tokyo: Rikkyo University.
1999 Nominals of Fatamanue, Seram Maluku: A subgrouping argument in Central Malayo-Polynesian. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 24(3), 467-484.
- Shintani, Tadahiko, et Yvonne Paita.
1990 *Grammaire de la langue de Païta*. Noumea: Societé d'études historiques de la Nouvelle-Calédonie.
- Taber, Mark (ed.)
1996 *Atlas bahasa Tanah Maluku (Maluku languages atlas)*. Ambon: Summer Institute of

- Linguistics dan Pusat Pengkajian dan Pengembangan Maluku, Universitas Pattimura.
- Toki, Satoshi (ed.)
 1998 *The remnants of Japanese in Micronesia*. Memoirs of the Faculty of Letters 38. Osaka: Osaka University.
- Tsunoda, Tasaku
 1974 *A grammar of the Warrungu language, North Queensland*, M.A.thesis, Monash University.
 1981 *The Djaru language of Kimberley, Western Australia*. Pacific Linguistics B-78. Canberra: Australian National University.
- Volker, Craig
 1981 *Rabaul creole German*. München: Lincom Europa.
- Voorhoeve, C. L.
 1975 *Languages of Irian Jaya: Check list, preliminary classification, language maps, wordlists*. Pacific Linguistics, B-31. Canberra: Australian National University.
- Wurm, Stephan A.
 1982 *Papuan languages of Oceania*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Wurm, Stephan A. (ed.)
 2001 *Atlas of the worlds languages in danger of disappearing*. Paris/Canberra: UNESCO Publishing/Pacific Linguistics.
- Wurm, Stephan A., and Shiro Hattori (eds.)
 1981-1983 *Language atlas of the Pacific area*. Pacific Linguistics, C-66. Canberra: Australian National University.
- Wurm, Stephan A., Peter Mühlhäusler, and Darrell T. Tryon (eds.)
 1996 *Atlas of languages of intercultural communication in the Pacific, Asia, and the Americas*. 3 vols. Trends in Linguistics, Documentation 13. Berlin: Mouton de Gruyter.

